



家庭と学校ががっちり手を繋ぐ2年目に

「折り合い」を付けることで楽になる・力が出る

発達の凸凹特集の続報です。執筆者の小谷先生が診察した凸凹のある子どもの特徴が例示されています。

「診察中でも質問に答えない」「おもちゃを振り回す」「注意が耳に入らない」「同じことをすぐに繰り返す」「集団登校で友だちともめる」「宿題をやりたがらない」「誰とも遊ぶ約束をしない」「給食を口にしない」「ノートも取らない」「教科書も開かない」等

こうした行動が見られれば、そのまま発達障害ということでは

小児科医の診察は親御さん頼みです。例えばこんな具合「高熱が出ました(ママ)」「検査の結果、インフルエンザです。薬を処方します。水分もたっぷり取らせてくださいね(医師)」。医師は保護者に診断結果を伝え、それに基づく治療について説明し、同意を得て、家庭での対応をお願いします。ママとパパあつての治療です。オールの通信簿を差し上げたい気持ちになります。

これが発達障害の子どもの場合だと、保護者の様子も診療の内容も異なります。

診察中でも、机に登る、質問に答えない、おもちゃを振り回す子もいます。「やめなさい。ここ病院でしょ」「先生の質問に答えなさい」。親御さんからとがった声が、子どもは一瞬動

子どもの未来に希望を見いだせない保護者に「発達でこぼこ」の説明をすると「納得がいった」という安心と「二生続くのか」という不安とが交錯するようです。

そこで大切なのは、保護者にねがいの言葉をかけて、具体的な手だてを提案すること。提案がうまくいったかを後で確認する必要もあります。

提案は、例えば子どもの接

と他との比較でわが子を低評価し、焦ったり劣等感を持ったりすることが一番の問題です。

ですので、小谷先生の指摘するような凸凹のある子の特徴が顕著に見られ、なかなか改善が図れない時には、専門医の診断を受けてみるのが大切です。診断の際には個別の発達検査を実施することが多く、結果を見ると具体的な数値で凸凹の程度が見えてきます。



イラスト・鈴木勇介

きを止めますが、注意は耳に入らなくても、すぐ同じことを繰り返します。

学校でも「集団登校で友だちともめて、毎朝付き添います」「宿題をやりたがらない」「誰とも遊ぶ約束をしない」など、悩みが尽きません。学校からの電話におびえ、座布団を電話にかぶせてしまったお母さんもありました。

具体的には声のかけ方、生活習慣の整え方、片づけ方、食事の工夫など。担任との連携方法や、通級指導教室といった活用可能なリソースについての学校との調整についても提案します。福祉サービスも大事です。子どもに応じた対処法を伝えていきます。

小学1年のマナちゃんは学校で給食を口にせず、ノートも取らず、教科書も開きません。1学期の目標は「教科書を開きましよう」とした。家で宿題をするのも一苦労。

はありません。その子にはこうした特性 = 凹の部分があると捉えることが大切です。

親として凹を気にして、その原因が「これまでの自分の子育てのせい・・・」と考えてしまうと、自信を失い、疲れて心の余裕がなくなります。

また、「人にはみんな大なり小なり凸凹があり、子どもの時は、特に発達の面での凸凹がある」という理解を、夫婦間・家族間で共有していないと、「あなたの育て方が・・・」等、不要な責任のなすり合いになったりして家族間の関係がギクシャクしてきます。親としては、「他の子ができていることが何でわが子はできないの！」

対応が分かってくると、親としては「なるほど、そういった面が苦手なんだ。なら、お医者さんの言うとおりに、こんな関わり・言葉がけをしてみよう。」と、親自身が折り合いを付けられるようになります。

注意すべきは発達の凸凹なのか、それとも保護者の無関心・生活経験の不足等の結果、年齢相応の判断力やコミュニケーション力、道徳性等が育っていないのかの判断です。判断する際には、これまでの生育歴や家庭の養育環境等を吟味した上で、専門的な知見が必要になります。

